
魔法少女リリカルなのは～ 剣術を学ぶ気術剣士とアニメを愛する陰陽師の異世界物語～

蒼き演奏者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 剣術を学ぶ気術剣士とアニメを愛する
陰陽師の異世界物語

【Nコード】

N9852M

【作者名】

蒼き演奏者

【あらすじ】

現在は廃れつつある剣術『時乃流流連剣』を祖父に厳しく教わっている時乃悠と同じく廃れつつある『霞狩流陰陽術』を教わっているながらアニメをこよなく愛する霞狩秋風は小学生の頃からの親友同士。ある日、悠は自室に遊びに来た秋風が借りてきたレンタルDVDのアニメ『魔法少女リリカルなのは』と一緒に観ることになった。しかし、DVDプレイヤーから奇妙な音が鳴り始めた瞬間、テレビから放たれる真っ白な光に包まれる。そして、気づけば秋風

と共に『魔法少女リリカルなのは』の世界に迷い込んでいた！！しかも、その世界は秋風の知っている『魔法少女リリカルなのは』のアニメとは異なる点が幾つもあった！！異世界に住んでいるはずのユーノがなのは達と同じ学校に通う幼馴染同士で海鳴に住んでいる！？しかも親も健在！？一般人であり続けるはずのアリサとすずかが魔法少女に！？死んでいるはずのブレスアの娘アリシアが双子の姉としてフェイトとアルフと一緒に登場！？これは……大した魔法が使えないのかかわらず、ある意味強い彼らが織り成す……ありえそうでありえない物語……。

第一章：始まりはいつも唐突なものだと思う（前書き）

この小説を初めて開いてくれた方へ。初めまして。この序説の作者こと蒼き演奏者と申します。

小説を書くのは初めてのことなので、色々と不慣れなところが御座いますが、温かく見守っててください。

まず始めにこの小説は私こと蒼き演奏者が原作『魔法少女リリカルなのは』を参考に自由な発想で書いたものです。

原作との関連性は一切ありません。また、オリキャラを主人公にしたものですので、そういったジャンルが苦手な方は読まないことをお勧めします。

それでも平気な方はこのまま進めてください。また、国語が苦手ですので誤字や抜けている文字があるかもしれませんので、もし気付いた場合は教えてください。

小説の感想もありましたら書いてくれると嬉しいです。

蒼き演奏者「お待たせしました。では、そろそろ始めましょう……。ありえそうでありえない物語を……」

第一章：始まりはいつも唐突なものだと思う

Side：????

……どれくらい気を失っていたのだろうか。目がまだチカチカする……。

視界が回復するとそこは見知らぬ緑の生い茂る林道だった。

こういう場合、大概は『ここは何処！？私は誰！？』と言つのが定番だが、幸いなことに記憶喪失にはなっていなかった。

とりあえず、どうしてこの様な状況になったのか落ち着いて整理してみる。

僕は時乃悠^{ときのゆう}、16歳。現在は廃れつつある『時乃流流連剣』という剣術を祖父に厳しく教えられている以外、ごく普通の高校一年生だ。

今日、僕は親友と一緒に自室で『魔法少女リリカルなのは』というアニメを観るはずだったのだが、DVDプレーヤーにDVDを入れて再生ボタンを押したはずなのに一行に待っても始まらず、奇妙な音がDVDプレーヤーから鳴り始めた瞬間、突然テレビから眩い真っ白の光が放たれ視界を奪われた。

……そして、目覚めると部屋にいたはずなのに、いつの間にか僕の部屋にあったはずの僕と親友のリュックサックまでも外に出ていて、しかも見知らぬ場所に居たのだ。

悠「本当にどうなっているの……？」

少なくとも家の近所ということとはまず無いだろう。こんな静けさが漂う枯れ木道などないはずだ。

いや、それ以前に……二階の自室に居てアニメを観るはずだった

のに。何故、外に移動しているのだろうか？

原因は……やっぱりテレビから放たれたあの謎の光だろう。原理など一般の高校生に分かるわけが無いが……瞬間移動したことはまず間違いない。

……だけど、今は原因や理屈を考えている場合ではない。ここで考えていても何も始まらない。

悠「と言っても……どうすればいいんだろう？」

こういう場合は、まず誰かに道を尋ねるのが一番手っ取り早い方法なのだが……周囲には人の姿どころか気配すらも感じられなかった。

悠「……一名は除いてだけど」

「はあ……」とため息をつきながら後ろを振り返ると、そこにはイケメン……もとい親友が気持ちよさそうに寝息を立てていた。

???「むにやむにや……ぐふふふ。もう食べられない……」

……なんともベタな寝言を言いながら。

あまりにも気持ちよさそうに涎を垂らしながら眠っていたので起こすのを躊躇していたが、そろそろ起こすべきだろう。

悠「秋風！起きて！眠っている場合じゃないよ……！」

眠っている親友、かがりあきかせ霞狩秋風に歩み寄り身体を揺すりながら声を掛ける。

秋風「ううん……。なんだよ悠。せっかくいい夢を見ていたのに

……」

しばらく揺すっていると不機嫌そうな声と顔で目を覚ました。
まだ完全に眠気がとれていないのか、瞼が半開きで上半身を起こしただけだった。

悠「のんきに眠っている場合じゃないよ。周りを見てみてよ」

秋風「はあ？周りを見るも何もここはお前の部屋……」

そういつて秋風はキョロキョロと辺りを見渡し始める。
ようやく現状を理解できるほどに目覚め始めたのか……座り続けていた身体を勢いよく起こしさらに辺りを見渡した。

秋風「……なあ、悠」

悠「なに？秋風」

秋風「ここは何処だ！？何故に俺達は外にいる！？お前の部屋は！？テレビは！？アニメはどうなった！？」

悠「いやいつぺんに聞かれても返答に困るよ！……僕も何がなんだか」

秋風「いや待て！……この風景、どこかで見たことあるよな……？……ッ！……？！……」

そう言ってしばらく無言で考え込んでいた秋風が俯いた状態でわなわなと身体が震え始める。

まるで沸き起こっている興奮を押さえ込んでいるかのように……。

悠「???秋風、どうしたの？」

秋風「なんてこった!!!このアニオタである俺が何度も見た風景にすぐ気付けぬとは!!!!だが、これは現実か？俺はまだ自分の夢に酔いしれているのか!？」

悠「ちよつ、ちよつと秋風!？落ち着いて!ここは夢じゃないし、ちゃんと起きてるよ!」

秋風「夢じゃない!？本当に現実なのか!？ちよつと確かめる!！」

興奮気味になった秋風は右手で自分の顔の頬を思いっきり捻り始めた!!!

秋風の奇妙な行動に僕は見守るしかなかった。

秋風「いたたたたた!!!!本当に夢じゃない!!!これは現実!!!いやっほおおおおおおお!!!」

そして今度は両腕を上には挙げながら奇声を挙げ始めた!!これを第三者が見たら明らかに不審者にしか見えない!!!下手すればその場で通報されてもおかしくない状況だ。幸運なことに、ここには人っ子一人いなかったのだが。

悠「あ、秋風!？一体全体……」

秋風「悠!!!落ち着いて聞いてくれ!!俺は大変なことに気が付いてしまった!!!ここは…否!!この世界は!!」

悠「『この世界』……?」

何故だろう？今の秋風は非現実的なことを口走りそんな雰囲気を出していた。

そして、その直感は……見事に……。

秋風「アニメの世界！しかも今日！俺達が観る筈だった『魔法少女リリカルなのは』の世界だ！」

的中してしまったのだ……。

……僕はどう言葉に出せばいいのだろうか……？

悩みに悩んだ末、僕は思ったことを口にした。

悠「ええつと……そうなんだ」

自分でもなんとも言えない返答だったが……他に言える言葉が自分の中にはなかった。

秋風「なんだよ悠！その気の抜けた返答は！？アニメの世界！しかも『魔法少女リリカルなのは』の世界だぞ！？」

悠「そういわれても……僕はそのアニメを知らないし……そもそも本当にアニメの世界なの？」

そこが一番重要だ。なにせアニメの世界にいるなんて俄かに信じがたい。

僕の疑問に秋風は興奮気味で力説する。

秋風「間違いない！！ここは第一話に登場する場所！！何度も観たんだ！！間違えようが無い！！」

声を荒げながら秋風は悪までここはアニメの世界だと言っている。長年の付き合いをしている僕だからこそ分かるが秋風は冗談を言うことはめったに無いし、秋風の言葉に嘘を感じられない。

悠「うう〜ん……百歩譲ってここが『魔法少女リリカルなのは』っていうアニメの世界だとしたら……なんで僕達はこの世界にいるの？」

秋風「考えられる原因はやはりテレビから放たれた光だろうが……この際、原因などどうでもいい!!」

悠「どうでもいいの!?!そこ一番重要じゃないかな!?!普通!!」

秋風「何言っただ!?!夢までに見た異世界からの召喚だぞ!?!俺達の武勇伝が始まる予感!!ワクワクしてきたああ!!」

だ、ダメだ。今のハイテンションな秋風とは話が噛み合わない……。

このまま話を続けても折られそうな気がする。

???「ああ〜……君達。ちよつといいかな？」

悠&秋風「はい?」

突然、後ろから知らない男性の声が聞こえたので秋風と一緒に振り向くとそこには……。

何故か……警備員さんがいた……。

警備員A「いやね。私は私立聖祥大学付属小学校付近の警備員でね。この付近で変質者が出るといふ噂が流れていてね。まさか……君達

「？」

え？なに？どういうこと？

つまりこの警備員さん。僕達がその変質者だと疑っているの！？

秋風「いきなり何ですか！俺達がロリター・コンプレックス、通称ロリコンだとしても！？」

悠「いやいやいや！秋風、そこまで言ってないよ！！僕達、怪しいものではない！」

警備員A「でもね。さっきまで君の隣にいる子が不可解なこと言っていたよね？やれ異世界からの召喚だの、武勇伝が始まるだの」

聞かれてた！？

いや、あんな大声を上げていて聞こえないというのがおかしいけど……。

ど、どうしよう。身元を証明するものを出せば疑いは晴れるけど……残念ながら身元を証明するものなんか一切持っていない。

いや、それ以前に僕達はこの世界に存在するはずの無い存在。仮に明かしても調べられれば余計に疑いが大きくなる。

秋風「悪まで俺達の変質者でロリコンだと？バカを言うな！俺はただ、美少女を愛する男だ！そんな変態と一緒にするな！！」

悠「あ、秋風！？自分で自分の首を絞めてるよ！そのセリフ！！」

秋風の口を塞ごうとしたが、遅かった。

目の前の警備員さんは爽やかな笑顔を僕達に向けていた。

但し、右手には警棒と左手には銀色の手錠を持ちながら……。

警備員 A「君達？ちよつと署までご同行しようか。なぐに、話は向こうでたつぷり聞いてあげるから……ね？」

そう言つてこっちに近づいてくる警備員さん……。

やばい、非常にやばい……爽やかな笑顔がとんでもなく怖い……。何言つても問答無用で逮捕される！！

こつなつたら……！！

悠「秋風！！」

秋風「悠！！」

僕達はお互いの名前を呼び合つた。

なにも言うことはない。お互いの考えは一致していた。

一斉に警備員さんに背を向け地面に置きっぱなしのお互いのリュックサックを素早く掴み、全速力で逃げる……！！

警備員 A「あ、こら！！待ちなさい！！暖かいカツ丼を食べさせてあげるから捕まりなさい！！」

後ろから警備員さんがそんなこと言う……って、カツ丼で釣ろうとしてるよ……！！

秋風「あの警備員……。一生警備員のままだな」

悠「うん……僕も今そう思つた」

……果たして僕達はどうなるのやら……。

そんなことを思いながら僕達は振り切ろうとさらに速度を上げて

行くのだった。

第一章：始まりはいつも唐突なものだと思う（後書き）

主人公達による後書きという名の語り

秋風「と、まあ。俺達の物語の始まりがこれだ」

悠「自分で言うのはどうかと思うけど、こんな始まり方でいいのかな？」

秋風「そこは一番気にしちゃいけないことだ。さて、次回はいよいよ原作主人公のご登場だ！！」

悠「次回！！」第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！！～前編～」

秋風＆悠「」ご期待ください！！」

第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！～前編～（前書き）

蒼き演奏者「第二章目です。いよいよ原作主人公とその友達が登場します。感想などがありましたらどうぞお書きください」

第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！――前編――

Side：霞狩 秋風

警備員にロリコン疑惑で追われていた俺達だが、どうにか逃げ切ることに成功した。

追いかけていている間、後ろからは「大人しくお縄を頂戴しなさい！！」だの「無駄な抵抗は止めて投降しなさい！田舎のお袋さんが泣いているよ！？」など警備員の言葉を聞きながら。

てか、俺達は人質を取った立て籠もり犯か！？と心の中でツッコミを入れながら。

逃げて逃げて逃げまくり、相手から見えない程度に引き離し、すばやく悠と隣の茂みに身を隠しどうにか逃げ切ったが……。

秋風「まったく！出会い頭にいきなり変質者扱いなんて酷いぞ、あの警備員！！」

悠「仕方ないよ。あれだけ珍妙な会話で騒いだら変質者と間違えられてもおかしくないよ」

秋風「悠。お前はどっちの味方なんだ？」

茂みから出てあの警備員がいないか確認する。

逃げ切ったとはいえどあの警備員のことだ。

まだこの近辺を詮索している可能性があるからな。

秋風「てか、悠。どうせ逃げるんだったら俺ごと『神速』を使つて逃げればよかつたんじゃないか？そうすればこんなに走る必要ないだろ？」

悠「ムチャ言わないでよ。秋風一人ならまだしも、さすがに重い荷物……しかも2人分背負った状態で『神速』なんか使えないよ。仮に使えても移動距離は短くなってると思うし……。それで……秋風。勢い任せに逃げたのは良いけど……ここは何処？」

秋風「いやさつきも言ったがここは……て、お前は『魔法少女リリカルなのは』を知らないんだっただな」

悠の家は分家といえど、れっきとした剣術を学ぶ由緒正しき家系だからな。

おまけに悠は剣術が趣味だからな。休日の大半を剣の稽古に注ぎ込んでいる。

まあ、俺の家も『霞狩流陰陽術』を受け継ぐ陰陽師で分家だが、そう厳しいことは無い。

現に俺の部屋はアニメのDVDや漫画、小説などがたくさんあるからな。

それはさておき、悠自身、ここ最近までアニメというのに興味が無かった。

そんな悠のために今日、俺一番お勧めのアニメ『魔法少女リリカルなのは』を第一期から第三期を一気に見せようと思っていたんだが、まさかこんなことになるうとは夢にも思わなかったぜ。

秋風「一通り説明するぞ。ここは『魔法少女リリカルなのは』の世界で第一話に登場する場面だ。そしてここはこの原作の主人公高町なのはちゃんが魔法が存在する世界の住人であるユーノ・スクライア君と出会う場所だ。そしてこの出会いがなのはちゃんの魔導師となるきっかけのひとつだ」

悠「ええっと、つまりこの場所は『魔法少女リリカルなのは』にと

って重要な場所って事？」

秋風「平たく言えばそうだな」

さて、簡単な説明は終えたが、これからどうするべきかな。
俺個人としては全力で『魔法少女リリカルなのは』に介入したい
のだが……。

悠「それで秋風。これからどうす」
「？」

秋風「どうした？悠」

悠「……なにか声が聞こえなかった？」

秋風「なんだと……？」

今は夕暮れ時、そして声が聞こえただと……？

まさか……彼……なのか？

俺は全神経を耳に集中してみたが、風によって揺れる草木の音以外
外にも聞こえない。

秋風「空耳じゃないか？悠」

悠「いや、なんていうのかな。耳から聞こえたんじゃないくて、その
……頭の中から直接聞かされているような……。聞き取り難かった
けど……助けてって」

おいおいマジか！？

悠には『念話』が聞こえたというのか！？
なんで俺には聞こえないん。

助……け……て……。

秋風「?!?!」

悠「あ！また聞こえた」

秋風「ああ！俺にも聞こえた!!」

間違いない。確かに聞こえた。

この声……ユーノ君だ!!

秋風「こつちの方角か！悠、行くぞ！」

悠「了解！」

『念話』によつて聞こえた声の方角に向かつて走り出す俺達。

ここで原作知識のある俺だからこそ気付いたことがある。

『念話』とは離れた相手に考えたことを声に出さず頭に直接伝える基本の補助魔法だ。

そして、『念話』は魔力を持たない者には言葉が伝わらないのだ。つまり！俺達はどのくらいの魔力資質を持っているかは分からないが魔導師としての資質を持っているということだ!!

俺は今、猛烈に感動している!!!

俺達はしばらく走っていると怪我をし気絶している小さな動物（『念話』した人物）を発見した。

悠「……？フェレット……かな？何でこんな場所に？」

秋風「悠……」。一見フェレットだが、この方が先程説明したユーノ

君だ」

悠「ええ！？フェレットが？！名前からして人間じゃないの！？」

秋風「人間でありフェレットだ」

悠「いやどつちなの！？てか、どう見てもフェレット以外の何者でもないよ！？」

秋風「落ち着け悠。ユーノ君は結界魔導師であり変身魔法の使い手だ。この姿はその魔法によって変化した姿だ」

悠「そうなんだ……。て、あれ？この子……首に何か巻いてるよ？」

そっついフェレット……もとい、ユーノ君を抱きかかえた悠が彼の首に巻かれているものを見せるって、ええ！？一体全体どうなってるんだ……？

ユーノ君に巻かれている紅く丸い宝石のような物は主人公高町なのはちゃん専用デバイスとなるレイジングハートだというのは分かる。が……そこにあるのはそれだけでなく、あと2つが巻かれている……！

1つは紫色の指輪型……もう1つは紅い花型の髪飾り……か？

とにかく、原作知識をもつ俺すら知らない待機状態のデバイスがある。

秋風「（アニメではユーノ君が首に下げているのはレイジングハートだけのはず……なぜ他にデバイスが、しかも2つあるんだ……？）

」

悠「秋風……？」

秋風「（いやいや、よくよく考えればあの警備員だつてそうだ。彼はアニメに登場すらしていない人物だった！！なのになんで……？）」

悠「秋風！！！」

秋風「うお！？つて、なんだよ悠。人が真面目に考え込んでいるときに……」

悠「……向こうから……氣の氣配がする……。誰か来るよ……多分……3人ぐらい」

秋風「なんだと！？」

悠が学んでいる『時乃流流連剣』は人間といった生命ならば誰もが持っているという『氣』という力を用いる氣術劍士の流派の1つだ。

その中には相手の氣の氣配を察知し、相手の居場所や数を把握出来る者もいるが、悠はまさにそれができる。

ただ、悠曰く、「祖父みたいにそうとう遠くにいる氣を察知することは出来ない。ある程度近づいて来ないと感じられない」らしいが……。

だが、間違いない！！このタイミングにして3人来るとなると彼女達に違いない！！！！

やばい！！ここで会つのは非常にまずい！！

秋風「隠れるぞ、悠！！ユーノ君はそこに置くんだった！！」

悠「え！なんで！？」

秋風「いいから！今は隠れるんだ！！」

俺はそう言いユーノ君を元の位置に置いた悠の右腕を掴み、再び茂みの中に身を隠した。

S i d e：時乃 悠

突然、秋風に無理やり引っ張られ隠れたのだけど何で隠れる必要があるんだろう？

そう思っていると先程感じた氣を持った……小学生の女の子達がユーノ君を見つけた。

1人は茶色の髪に緑色のリボンでツインテールをしたショートヘアの黒色の瞳をした子、印象は明るく優しそうな子。

もう1人は一目で外国人の血を引いた子だと分かった。金髪の髪にロングヘアで瞳は翡翠色の子、印象は勝気な真っ直ぐな子だと思う。

最後の1人は他の2人と違い、印象は物静かで大人しそうな子だった。髪は紫色でヘアバンドを付けたロングヘアに瞳は黒色をしていた。

3人は同じ白を基調とした制服を着込んでおり、この時間帯だと多分、下校途中だと思う……。

???「動物？怪我してるみたい」

???「あ、うん。ど、どうしよう?」

「……どうしようって……とりあえず病院！」

「……あ、獣医さんだよ」

「……ええっと、この近くに獣医さんってあったっけ？」

「……ああ……ええっと、この辺りだと確か」

「……待つて、家に電話してみる！」

ユーノ君を見つけた3人組は彼が怪我していることに気付くと獣医に連れて行くことに奮闘していた。

秋風「あ……危なかった……。もう少し隠れそびれたら鉢合わせするところだった……」

悠「あの秋風……あの子達のこと知ってるの？」

秋風「ん？ああ、あの茶色の髪をした子が主人公なのはちゃんだ。で、金髪の子がアリサ・バニングスちゃんで紫色の髪をした子が月村すずかちゃん。あの2人はなのはちゃんの同級生であり親友だ」

悠「あの子が……？でも、なんで僕達が隠れる必要があるの？」

秋風「ああ……今のタイミングで会うのは非常にまずいと思ってな」

彼女達には聞こえないように小声で僕達は会話をしているとすずかちゃんが携帯のディスプレイを閉じた。

すずか「なのはちゃん、アリサちゃん。この近くで獣医さんのある場所が分かったよ」

なのは「本当！？じゃあ急いで獣医さんのところに行こう！」

アリサ「ちよつと待って！2人とも！」

獣医さんの元へと急いで向かおうとする2人をアリサちゃんが呼び止めた。

なのは「アリサちゃん？」

アリサ「ねえ、2人とも……。あの声……。一体、誰が話しかけてきたと思う……。？」

なのは「え！？アリサちゃんも聞こえたの！？」

すずか「声って……。『助けて』って呼んでいたこと？」

アリサ「やっぱり2人も聞こえたのよね……。幻聴だと思ってたけど……」

あの声……。？もしかして、ユーノ君の声があのかの3人にも？

秋風「おかしい……」

悠「え？秋風、一体何が？」

秋風「いや、悠や俺に聞こえたのは『念話』という魔法だ」

悠「『念話』……？」

秋風「『念話』とは離れた相手に考えたことを声に出さず頭に直接伝える基本の補助魔法だ。そして、『念話』は魔力を持たない者には言葉が伝わらない。あの声が聞こえるのはお前と俺以外は、なのはちやんだだけだ。原作ではあの2人にはまったく聞こえていないはずだ。第一にこんな会話があるはずない」

え？それって……一体どういうことなんだろう？
そう思っていると3人の会話が進んでいく。

アリサ「声が聞こえた方角に来たらこの子がいた。この子以外他にはいなかったわ。…となると」

すずか「それって、この子が私達に呼びかけた……？」

なのは「ア、アリサちゃん……。それはアニメや漫画の観過ぎだよ。動物がお話できるわけないじゃない」

アリサ「私だって自分でもどうかしてると思うわよ……。でも、それじゃあ一体、誰が私達に助けを求めたのよ？1人だけしか聞こえたのなら幻聴で片付けられるけど……。3人も聞こえたのなら幻聴じゃないわ」

確かに……。最初僕も幻聴と思ったけど2度も聞こえしかも2度目は秋風にも聞こえたと言っていた。

1度だけならまだしも2度も聞こえたら幻聴では片付けられない。すずか「でも、アリサちゃん。今は声の主を探すより、この子を獣医さんに診せるほうが先だよ」

なのは「そうだよ、アリサちゃん。声については後で考えることにして、今はこの子を獣医さんのところに連れて行こうよ」

アリサ「ううーん……そうよね。分かったわ……すずか、案内をお願い」

すずか「うん！こっちだよ！」

すずかちゃんを先頭に僕達とは来た方向の逆の道を走っていく彼女達。

しばらく様子を見ていた秋風が喋りだす。

秋風「よし……追いかけるぞ、悠」

悠「え？追いかけるの？」

秋風「ああ、俺達はこの世界の地理を知らないからな。彼女達を追いかけないと、この林道を抜けた後、道のりが分からぬまま路頭に迷うことになる」

なるほど……て、あれ？

悠「秋風は『魔法少女リリカルなのは』を知ってるんだよね？だったら、3人を追いかける必要はないんじゃない？」

秋風「……残念ながら原作知識を持っても地理まで分かるわけじゃない。それに彼女達がこれから向かう『榎原動物病院』までの道のりを知っておく必要がある」

悠「なんで？」

秋風「『なんで？』ってそりゃあ……そこはなのはちゃんか魔導師となる場所だからだ。俺達は一般人として偶然そこに遭遇したことにして原作に介入するんだ」

悠「ええっと……秋風はなんで『魔法少女リリカルなのは』の物語に介入したいの？」

秋風「そりゃあ……俺がアニオタだからだ！！」

答えてない。全然答えになってないよ、秋風。

でも……秋風らしい答えだと思い、納得せざるおえない。

それに……僕も彼女達の物語がどのようなものなのか興味がある。

悠「分かったよ。僕も原作に介入してみたい」

秋風「分かってくれるか親友！！ならば善は急げだ！急いで後を追うぞ！」

茂みから勢い良く出た僕らは彼女達の元へ急ぎ、後を追っていく。
……今、思ったんだけど。

小学生をこそそ追いかける行為って、第3者からはストーカーにしか見えないのでは？つと。

そう気付いたとき「誰にも見つかりませんように」と切に願いながら走っていく僕だった。

第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！……前編（後書き）

主人公達による後書きという名の語り

秋風「さて、とりあえず前編は終了だ」

悠「やっと原作の主人公が登場したけど……更新が遅くないかな？」

秋風「確かに……作者には頑張ってもらわなきゃ困るぜ」

悠「さて、小説を読んでくれた方へ！前書きでも書いていましたけど感想などがありましたら遠慮なくご報告を！」

秋風「なかったら応援でも構わないぜ？では、次回！『第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！……中編』ご期待してくれよ！！」

第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！――中編（前書き）

蒼き演奏者「すみません。ようやく……書き上げられました。遅く
なってしまった分、前編より大分長くなっていますので」

第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！――中編――

Side：時乃 悠

彼女達を見つけた僕は直ぐに彼女達に見つかからないよう慎重に追尾し、夕方ということもあって人がいなかったのが幸いし、見つかることなく目的地の『榎原動物病院』に辿り着いた。

その後、動物病院の窓の下に入り込み彼女達の様子を確かめ、塾に向かう彼女達をまた追いかけた。

そして僕は塾の近くにあるランランーと意味不明なことを言うその店のマスコットのなピエロのハンバーガーショップで、夜間で時間潰しをした後、お持ち帰りを頼み再び『榎原動物病院』に行くことにした。

ちなみにその店名は『マ ドナルド』ではなく『ミクドナルド』という、いかにもアニメや漫画とかに登場する変な名前だった。

僕が買ったのは、てりやきバーガーとポテトMサイズとコココーラLサイズ。

秋風が買ったのは、ビッグミックスとポテトLサイズとファンタグレイプMサイズだ。

秋風「さて、まずは（パクパク）状況を一度整理して（ズズズ）みようか（ゴックン）」

悠「食べるか喋るかどっちかにしようよ、秋風……」

秋風「じゃあ、食べ尽くす方で。（パクパク、モグモグ、ズズズ、ゴックン）ふう……ごちそうさま」

早ッ！！買ってからまだ3分も経っていないのあの量を食べ尽く

した！

秋風「話しあった結果、ひとつの仮説に辿り着いたな。この世界はアニメの『魔法少女リリカルなのは』であって『魔法少女リリカルなのは』ではない世界……。『平行世界』……。またの名をパラレルワールドということだ」

悠「『平行世界』……。この世界はアニメの『魔法少女リリカルなのは』に似ているけど、まったく違う『魔法少女リリカルなのは』ってこと？」

秋風「悪まで仮説にしか過ぎないが……。そうだとしたら納得できる。原作では登場するとのない警備員やデバイス、あるはずのない会話……。そして……。決め付けは、あのハンバーガーショップだが……」

秋風の指差す方向に僕達が先程までいた『マ ドナルド』と言えるハンバーガーショップがある。

それを見た僕達は「ええ！？なんで『マ ドナルド』があるの！？（あるんだ！？）」と叫んだのだ。

悠「まさか『マ ドナルド』があるなんて……。予想外だよ……」

秋風「ああ……。あれはさすがに予想外だったぜ……。それはさておき、もしこの仮説が正しければ俺が持つ原作知識が役に立つのか分からなくなったな」

悠「でも、これからなにが起こるか分からない僕にとっては重要なことだよ」

秋風「それもそうだな。よし！また簡単に説明するぞ。家に戻った

なのはちゃんは再びユーノ君の助けを求める声を聞き、『榎原動物病院』へと向かう。そこで目撃したのは、襲われているユーノ君と謎の怪物。そしてユーノ君なのはちゃんに協力を求め、自分が持つ力、『魔法』という力を彼女に託す。それでなんとか怪物と化した『ジュエルシード』の封印に成功したわけだ」

悠「『ジュエルシード』？」

秋風「『ロストログア』という未知のテクノロジーで造られた古代の遺産の1つだ。願いを叶える石なんだが、とんでもなく不安定だから歪んだ形の願いで叶う上に最悪の場合……次元にすら影響を与える代物だ」

悠「な、なんでそんな危険な物が地球にあるの？」

秋風「それを発掘したのがユーノ君だ。で、『ジュエルシード』が輸送されている際、事故が起こり、この海鳴市のあちこちにばらまかれた……。ユーノ君はそれを回収するために来たんだ」

そして、なのはちゃんはユーノ君に出会うことで魔導師となり、ユーノ君と共に『ジュエルシード』を全て回収することになったわけか。

秋風「さて、悠。これから俺達は『魔法少女リリカルなのは』の物語に介入することになる。俺達にとっては初の実戦となるが……覚悟は出来てるか？」

悠「大丈夫だよ、秋風。こう見えても僕は『時乃流流連剣』を扱う気術剣士だよ。見習いだけど……。秋風の方こそ、どうなの？」

秋風「愚問だな。俺だって『霞狩流陰陽術』を扱う陰陽師だ。同じく見習いだがな……。しかし」

秋風は背負っていた大きなリュックサックを地面に下ろした後、中身を取り出し地面に並べていく。

柄の付いた十字架、普通の十字架、人の形をした紙、数珠など一見ただのお払い道具にしか見えないが、『霞狩流陰陽術』を扱うものにとっては立派な武器だ。

秋風「備えあれば憂いなし……。商売道具を常備するのが陰陽師としては基本中の基本だ。悠の方はどうなんだ？」

悠「え？ああ、僕の方は……その」

僕は自分のリュックサックに入っていた中身を取り出し、地面に置いていく。

木刀、甲羅の形をしたデジタルカメラ、財布、救急箱、懐中電灯、筆箱、メモ帳を……。

携帯電話も持っているが先程の『ミクドナルド』で秋風と通話できるか確かめてみたが、この世界に存在しない機種であり、そもそも会社自体が存在しないため繋がることはなかった……。

当然のことながらメール機能やインターネットもダメだったので、役に立つことはないだろう。

秋風「悠……お前なんだこの役に立つようで立たなそうな代物の数々は！？てか、なぜに木刀？！真剣とかないのか！？」

悠「いや、これは非常用のリュックサックだったから……。それに真剣なんか常備していたら、銃刀法違反で逮捕されちゃうよ……」

秋風「む……言われてみればそんな物を見られたら即通報されるのがオチだな……」

それ以前に真剣を常備すること事態がおかしいけど……。

悠「他に武器らしいものがないし……この木刀で戦うよ」

秋風「……何も知らないやつが聞いたら無謀としかいいようがないが……まあ、お前ならそれで充分に戦えるかもな」

秋風とそんな会話をしていたら突然、彼の声が聞こえた。

聞こえますか？僕の声が聞こえますか？

悠「！……秋風！！」

秋風「……ああ、もちろん俺にも聞こえてる」

どうやら……。秋風の言う通り……。始まるんだろう……。『ジュエルシード』を封印する最初の戦いが！！

聞いてください。

僕の声が聞こえるあなた方、お願いです！

僕に少しか、力を貸してください！

お願い！僕のところへ！

時間が……。危険が……。もう！

……。

そこで『念話』が途絶えてしまった。

秋風「悠！俺がお前の荷物を持っておく！先に行け！！俺も後から追う！」

悠「了解！」

秋風にハリセン以外の荷物を渡し、すぐさま準備を始める。
まずは氣を使い、脚力と瞬発力を強化する。

悠「時乃流流連剣」刹那の歩」

そして、足の裏にさらに氣を集中させ左足を踏み込むと同時に一氣に開放する。

悠「神速！！」

僕の体が一気に前へと突き進む。

走ったとかそういうレベルではなく、一瞬にして50mほどの距離を移動したのだ。

バイクや自動車なんか軽く追い越す高速移動……それが『神速』だ。

唯一の欠点は高速移動中は方向転換できないくらいだ。

僕はそれを連続で使い、先程までいた場所から遠ざかり、目的地の『榎原動物病院』へと向かう！

Side：霞狩 秋風

それは何度見ても一瞬の出来事にしか見えない光景だ。
時乃流流連剣〱刹那の歩〱神速……。

一瞬にして消えたと思えば遠い距離に高速移動する……。
アニメや漫画好きなやつに分かり易く言えば『ソニックムーブ』
とか『フラッシュムーブ』とか『瞬歩』とか『瞬動』などといった
高速移動に属する技だ。

秋風「相変わらず、いつ見てもすごい……」

そして……同時に羨ましい！！

なんてつたつて陰陽師にはそんな高速移動技なぞ出来ん！！

俺達、陰陽師は元来遠距離系専門だからな。

『霞狩流陰陽術』はその概念から外れ、近接戦闘もこなせるように
にした流派だが、残念ながら高速移動技はない！！

などと考えている合間に悠の姿はどこにもいなかった。

秋風「……しかし……ユーノ君の台詞の一部からして……まさかも
しれんが」

それは『僕の声が聞こえるあなた方』という部分……特に『あなた方』……だ。

つまりユーノ君は複数の相手に『念話』を送ったことになる。

『念話』が聞こえるのは魔導師の資質を持つ者のみ。

現時点で確実に聞こえた人物は、俺と悠となのはちゃん。

そして……。

秋風「アリサちゃんとすずかちゃんにも聞こえたかもしれない!!」

あの茂みの中、彼女達が言っていたことが真実ならば……当然彼女達にも聞こえたはず。

そして彼女達の性格からして……絶対に助けに行くに決まっている!!

秋風「こりゃあ……のんびり考え事なんてしている場合じゃないな!!」

俺はすぐさま悠の後を追ひ、彼女達の手助けをしなければならな
いと思い走り出そうとする!

が!!

秋風「お、重い!!」

ただでさえ『霞狩流陰陽術』の戦闘道具やその他にも色々入っている俺のリュックサックに加え、悠のまでもある。

正直、間に合うかどうか……否!間に合ってみせる!!

秋風「待ってる!皆!!いま、助けに行くからな!!」

俺はそう叫び、『榎原動物病院』に向かいなんとか走っていく。

Side：時乃 悠

悠「着いた……のは良いけど……来るのが速過ぎた？」

僕が扱う『神速』の最大移動距離はせいぜい50mが限界だ。

しかし、当たり前だけどそれでも普通に走るよりとても速いのだから1分もせずに『榎原動物病院』の玄関前に到着した。が……どうやら、なのはちゃん来るより前に来てしまったらしい。

悠「（それにしても……凄く居心地が悪い……）」

先程からだけど、前に来たときよりその場の空気がかなり変わっていた。

目の前の病院の中からは、小さいが氣を感じることが出来る。おそらく、ユーノ君のものだろう。

そして、もう1つ……得体の知れない何かの氣配を感じられる……。

……いつでも戦えるように僕は木刀に氣を纏わせ威力や強度を強化している。

そして、覚悟を決めて病院のドアを開けようとした。

アリサ「ぜえ……ぜえ……ようやく着いたわね……」

なのは「はあ……はあ……あの声、やっぱりあの子が？」

すずか「はあ……はあ……でも、あの声……どこかで聞いたことがある気がする。……あれ？」

アリサ「ぜえ……どうしたのよ、すずか？」

すずか「……誰か……いる」

が、それはできず思わず声のする方を振り向いたら……彼女達
がいた。

悠「（え？なんで、アリサちゃんとすずかちゃんもいるの！？）」

あの『念話』は僕と秋風、なのはちゃんしか聞こえていなかった
はず……。

いや、そういえば……最初、彼女達を見た場面でアリサちゃんや
すずかちゃんにも『念話』が聞こえていた可能性のある会話を聞い
ていた。

もしあの2人にも聞こえたのだとしたら、ここに来ていてもおか
しくない！

アリサ「……貴方、誰？」

悠「え！？ああ、僕は時乃悠。ええっと、君達は？」

僕はなるべく怪しまれないようにアリサちゃんの質問に答えつつ、
さり気無く彼女達の名前を尋ねてみる。

なのは「あ、ええっと……私達は」

アリサ「ちょっと待ちなさい！なのは！こんな夜中、人も居ない動
物病院の前で光る木刀なんて持つてる不審者に軽々と名前を教えよ
うとしない！！」

悠「ふ、不審者……」

アリサちゃんの棘のある言葉に反論しようとしたが、彼女のいうことは最もなので反論の仕様がなない。

暗い夜道、誰も居ない病院に氣によつて強化したことによつて青白く光る木刀を持つて入ろうとする、自分。

……どう考えても不審者以外の何者でもないよね……。

すずか「ア、アリサちゃん……。今、なのはちゃんの名前を言ったからバレバレだと思うよ？」

アリサ「は！？しまった……。て、すずか！アンタもあたしの名前を呼んだからこの不審者にバレたじゃない！」

なのは「アリサちゃん……。アリサちゃんもすずかちゃんの名前を呼んだから、お相子だよ……。」

なんだろう……。僕の知らないところで彼女達がお互い無意識のうちに相手の名前を盛大に暴露していた……。しっかりとした子達に見えて小学生という精神面だから抜けているところがあるのだろう。

アリサ「ああもう！とにかく！アンタは一体何者なの！？ここにいる理由は！？」

悠「……なんか凄い逆切れだけど……。ええっと、さっきも言ったけど、僕は時乃悠。名前は時乃か悠のどちらで呼んでも構わないからここにいる理由は……。その、頭の中に助けを求める声を聞いたからかな？」

なのは「え！？それって……。つまり」

すずか「私達と同じなんですか？」

悠「ええっと、同じかどうかは僕は知らないから答えられないけど。その……そろそろ君達の名前やここに来た理由を教えてもらえないかな？ たった3人でこんな真夜中に閉まっているはずの動物病院に来るなんて変だと思っし」

当然だけど、僕は秋風の話から彼女達の名前やここに来た理由をしているが、ここは赤の他人として自然に聞いたほうが怪しまれないだろう。……約1名を除いてだけ……。彼女達は僕から少し離れ、輪になって僕には聞こえないように密談を始めていた。

アリサ「なのは、すずか。正直、どう思う？」

なのは「『どう思う？』って言われても……。少なくとも悪い人じゃないと思うけど……」

すずか「……私もなのはちゃんと同意見かな。嘘を言っているようには見えないと思うよ」

アリサ「そうね……。でも、なんであの悠さんって人は木刀なんて持ってるのよ？ しかも光ってるし……」

なのは「それは……ええっと……なんでだろう？」

すずか「うん……。私もさっきから気になってるんだけど。ええっと、防犯用かな？」

アリサ「すずか、それだけじゃあの木刀が光る理由にならないわよ」

一体、なにを話しているんだろう？

思わず聞き耳を立てようとする僕なのだが、それは突然だった。

キイイイイイイイ！！！！！

なのは&アリサ&すずか「「「！？！？」「」「」

悠「ぐうつ？！」

頭に変な音が聞こえた。黒板を引つかくのより酷い音。それも耳からではなく頭から聞こえるので相当に痛い。

なのは「また、この音！」

アリサ「なによこれ？いくら耳を塞いでも聞こえなくならない！」

すずか「……頭が割れそう……」

悠「（……？なんだろう？この感じは）」

酷い音と同時になにかが変わったような……そんな気がした。

まるでここにいるけどここではない空間にでも無理やり入れられたような感じた。

それだけじゃない。微かにだけど、獣のような唸り声が聞こえた！僕はすぐに木刀を右手で構え戦闘態勢をとる。

ユーノ君の氣と一緒に何かの気配が移動してきている。

それも……玄関から！！

悠「3人とも！！何処かに隠れて！なにか来る！」

なのは「え？」

すずか「『なにか』って？」

アリサ「お、脅しじゃないでしょうね？！」

悠「脅しじゃないよ！！ここは危険だよ！」

何かの気配の猛スピードで迫ってくる。

そして玄関から何かがドアごと突き破って来た！
咄嗟に木刀を盾にしてなにかの衝突を防いだが。

悠「くうっ！」

強化している筈なのに思わず押し負けそうになる。

今ここで防ぎ切れなかったら後ろにいる彼女達が巻き添えになる。
それならば……さらに強化すればいい。

そして、防ぎ切った瞬間……押し返してしまえばいい！！

悠「時乃流流連剣」粉碎の剣」

木刀に更に氣を纏わせ最大限に強化。

それだけでなく僕の両腕、両足の筋力を強化し、体重と共に木刀に乗せる。

悠「武人襲撃！！」

そう叫び、僕は得体の知れない何かに向けて押し退け様と力をい

れる。

先程まで押し負けていたのが嘘のように一気に相手の方が押し負ける。

全力で僕は得体の知れない何かを強化した木刀で殴り横に払い除けた。

その瞬間、得体の知れない何かはボールのように軽く吹っ飛び、敷地の木の真下にぶつかる。

なのは「なにになに？ 一体、なに？！」

すずか「あの黒い何か……悠さんと私達に襲い掛かってきたよね？」

アリサ「え、ええ……しかも、それを悠さんが打っ飛ばしたわよね……」

彼女達は黒い何かと僕がした出来事に驚き戸惑いの声をあげる。

そうだよな……事情を知らない人が見れば、戸惑うのは当たり前だよな。

まあ、それはさておき……。

悠「……とりあえず攻撃してみたけど……全然効いてない……？」

得体の知れない黒い何かは、深く土の中に埋もれ木の下敷きにはなっているが、かなり蠢いている。

まるでダメージを受けているようには見えない。

???「すごい……。魔法を使っていないのに、あの思念体を吹き飛ばすなんて！」

悠「え？」

声のするほうに振り向くがそこには誰もいなかった。
もしかしてと思い、視線を下に向けると。

「……あの……！ありがとうございます、皆さん！僕のために来てくれて！」

案の定、フェレット（人間）であるユーノ君が喋っていた。

悠「……………」

なのは「……………」

アリサ「……………」

すずか「……………」

僕を含め、皆が沈黙していた。

僕は事前に知っているとはいえやはりこう言いたくなる。
そう……。

悠&なのは&アリサ&すずか「……………」フェレットが喋ったあああああ
ああああ！……！」「……」

見事なまでに全員が同じことを同時に叫んだ。

「……あ、あの！皆さん、落ち着いてください！」

アリサ「落ち着けるわけないでしょ！だって喋ってるのよ！？それにその声……！」

すずか「まさか……そんなはずないよね？だってフェレットだし……でも、似すぎてるし……やっぱり」

なのは「う、うそ……もしかして……ユーノ君？」

……はい？え？なに？どういうこと？

まさか、彼女達はユーノ君のことを知ってるの！？

ユーノ「……やっぱり誤魔化せないよね。まさか、なのは達に資質があるなんて……」

アリサ「嘘でしょ？だってアンタ……その姿……」

ユーノ「この姿は魔法によって変身した仮初の姿だよ、アリサ」

すずか「アリサちゃんの名前を知っている……。でも、本当にユーノ君なの？」

ユーノ「うん。正真正銘ユーノ・スクライアだよ。すずか」

なのは「あの……ユーノ君。さっき魔法って言ってたけど……あの？」

ユーノ「……なのは達には黙ってたけど……僕と家族はもともと魔法のある世界の出身なんだ。だから、僕にも魔導師の資質を持っているし、魔法の勉強もしてた。……隠していてごめん」

い、一体全体なんだろうこの状況……？

とりあえず一度落ち着いて整理しないと……。

まず秋風の話ではユーノ君は異世界の住人。当然、なのはちゃん達とは面識などないし、なのはちゃん達もユーノ君のことを知らないはず。

だけど、この世界ではなのはちゃん達はユーノ君のことを前から知っているということだ。

悠「あの、ごめん。話しているところ悪いんだけど……」

ユーノ「あ、ごめんなさい！ええつと、あなたは……？」

悠「僕は時乃悠。ここにいるのは……たぶん、彼女達と同じ理由かな？」

ユーノ「悠さん……ですか。先ほどは、なのは達を守ってくださいありがとうございます！」

悠「う、うん……。それはいいんだけど、あれはどうにかしないの？」

僕の指差す方向に黒い何かは未だに埋もれ木の下敷きとなっていた。

ユーノ「そうだった……。早くあれを封印しないと！」

すずか「封印？一体どうやって？」

ユーノ「あれを封印するには魔法しかない。でも……今の僕じゃあれを封印することはできない」

なのは「え？それじゃあ……一体誰が……？」

ユーノ「さっき言ったと思うけど、なのは達には資質がある。魔導師としての資質が。だから」

アリス「それって……アタシ達があれを封印するしかないってこと？」

ユーノ「うん……。でも、そうするには時間が……」

???「ならば、ぜえ……俺に……ぜえ……任せろ!!」

本当に突然だった。僕にとっては聞きなれた声が聞こえその方向に目を向けると秋風がいた。

背中と右肩にリュックサックを持ち、左手に紫色の数珠を持ち、息を切らしながら走ってきた親友が。て、やけに遅いと思った僕らの荷物……秋風に預けたんだ。それを含め、秋風の荷物もあるんだからそれらを背負って走ったら疲れるのが当たり前だ。

ユーノ＆なのは＆すずか＆アリス「……だ、誰……?」「……」

悠「あ、秋風!」

秋風「ぜえ……待たせたな、悠!!あの黒い奴は俺が時間を稼ぐ!いくぞ!」

そういつと秋風の持つている紫色をした25個の数珠が輝きだし、数珠を結んでいた糸が切れる。

数珠は地面には落ちず宙に浮き、黒い何かに向かって飛ぶ。

そして数珠は黒い何かに囲むように並ぶ。
これは……秋風のお得意の捕縛術！

秋風「霞狩流陰陽術」捕縛の陣」数珠捕縛！！」

囲んだ25個の数珠から25本の白色に輝く細い糸が黒い奴に絡みつく。

霞狩流陰陽術」捕縛の陣」数珠捕縛……。

秋風曰く、数珠に霊力を込めそれらを対象に向けて遠隔操作し、相手を囲み霊力の糸を生み出しそれで縛り対象の身動きを封じる陰陽術にして基本中の捕縛術。

それを破ることのできるのは余程の力や霊力を持った者にしかできないらしい。

秋風「よし！これである程度は時間が稼げるはずだ！」

悠「でも……あれって幽霊とか人じゃないよね？どれくらい持ちそう？」

秋風「それは分からん！！なんせ、親父や母上以外の奴に使った事ないからな！」

……そういえば、秋風が家の人以外に陰陽術を使ったことなんて見たことがない。

まあ、僕もそうんだけど……。あんな剣術は人に向けられるようなものじゃないし。

ユーノ「これは、バインド！？いや、違う。ミッド式どころか魔法でもない。……あなた方は一体？」

秋風「俺は霞狩秋風。詳しい自己紹介などは後だ！一旦、ここから離れるぞ！俺の捕縛術があと何秒もつかどうかすらも分からんからな！君達も早く！」

なのは「え？あ、はい！」

すずか「わ、わかりました！」

アリサ「なんだか訳が分からないけど……わかったわ。ユーノ！あんたはこっちに来なさい！」

ユーノ「うん。わかったよ、アリサ」

アリサちゃんに呼ばれたユーノ君は彼女の腕に飛び乗った。

それを確認した先になのはちゃんとアリサちゃんとすずかちゃんとユーノ君を先に逃がし、僕達も彼女達を追う形で走り出す。

……これが僕達となのはちゃん達の初めての出会いであり、僕達の戦いの始まりでもあった。

第二章：出会いは必然？魔法少女達（！？）降臨！――中編――（後書き）

主人公達による後書きという名の語り

秋風「さて……前編の投稿から約1ヶ月と11日という訳だが……。
更新遅すぎだろ！？」

蒼き演奏者「うう……すみません。ネタとか話題とかストーリーが
行き詰って、何度書き直したことが」

悠「大丈夫なの……？まだまだ先が長いのに」

秋風「まあ、こんな作者だがこの小説を見ている方には感謝の言葉
が尽きないな。さて！次回！『第二章：出会いは必然？魔法少女達
（！？）降臨！――後編――』」

悠＆秋風「「ご期待ください！！！」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9852m/>

魔法少女リリカルなのは～剣術を学ぶ気術剣士とアニメを愛する陰陽師の異世

2011年10月7日17時47分発行